

林業を担う

先人が植え、自然が育てた山
100年先へ届ける、林業という仕事



伐採後に残る枝や葉をチップ化して、雑草の抑制に利用できないか模索している。



株式会社 大朋
代表 竹内 大介 さん

「昨日、ダニに噛まれて病院行っていました」と車から降りてきたのは竹内大介さん。昨年6月に株式会社 大朋を設立し、木材生産に取り組んでいます。林業を始めたのは28歳。それまでは数えきれないほどの職を経験したそう。2年ほど叔父の会社で林業を学んだそうですが、「元々人に雇われるのが苦手なので30歳で独立しました。林業という仕事は自分に合っていると思います。相手は木なので文句を言われることはないですからね(笑)。でも自分が手を抜くと必ず痛い目に合う。だからこそ妥協はしたくない」と竹内さん。

独立した頃は鯉節用のマテガシを専門に伐っていたそうですが、スギの素材生産を進められ、今では佐賀の伊万里木材と契約して出荷しています。

などの需要が伸びているので単価も安定している。ほとんど伐って出荷したいが、今は二人で作業しているので限界もあります。そう話すのには林業全体の問題があります。近年の木材需要や高性能林業機械の性能向上、普及によって素材生産は年々進んでいます。しかし、伐つたあとに植栽する森林整備は人力的なため、追いついていないのが現状。「30年後、40年後、自分たちの子や孫の世代に山を残してあげることができるのか」と竹内さんは危惧します。

「機械化は進んでも、木を植えるのは今も人の手です。さらに植林後5年ほどは炎天下での草刈りも必要で、耐えられずに辞める人も多い。さらに伐つてお金になるまで40年ほどの年月がかかりますからね」と林業の厳しい現状も話します。

「これからの山づくりは、自分たちのような小さな会社同士が、協力し合っていく必要があると思う。面積をまとめて作業したほうが効率もよく、余計な機械も必要ないですから」よく林業仲間でこんな話をしていまずと教えてくれました。



社名の「大朋」は、自分と妻(朋子さん)の名前からそれぞれ1字ずつ。鹿屋市から神川地区に移住し、山づくりに奮闘する6児の父。

林業を仕事に

大自然の中で働く、森林の仕事。
山を守り、育てるために歩きだした担い手たち

国勢調査によると、林業従事者の数は長期的に減少しており、平成27年には4万5千人となっています。

林業の高齢化率(65歳以上)はというと、平成27年時点で25%と全産業平均の13%に比べ高い水準にあります。一方では、35歳未満の若年者率は、全産業が減少傾向にあるのに対し、林業では平成2年以降増加傾向で推移し、平成27年には17%となっています。

これらの要因としては、月給制の導入や林業の機械化、国が進める「緑の雇用事業」による資格取得などが挙げられます。とくに若年層を呼び込んでいる要因の一つが、林業の機械化や作業の自動化だと言われています。林業には木の伐採や、枝打ち、決められた長さに丸太をそろえる玉切り、丸太を林内作業車で林道へ運び出す搬出作業もあります。これらの多くを重機で作業できるように

林業従事者と若年者の推移 (H2 ~ H27)



出典：平成27年度国勢調査

なったことも担い手増加の要因かもしれません。新たに林業を始めた方におすすめの事業が「緑の雇用」事業です。林業事業体に採用された方に対し、必要な技術を学んでもらうための講習や研修を、3年間通して支援する制度です。

2017年1月、空き家バンクを通じて愛知県から皆倉自治会に移住した東舎さん一家。株式会社岩崎木材に採用が決まり、国の就職支援制度を活用してチェーンソーや刈払機の講習を受講しました。昨年から「緑の雇用」を活用して林業機械の資格を取得している。「今年で緑の雇用事業3年目。林業の基礎や安全な作業について学べる制度に助かっている。今後は林業機械の腕を磨き、山を守り育てるフォレストワーカーを目指したい」と話す3児の父。



株式会社岩崎木材
東舎英之さん



大隅流域森林・林業活性化センター
ホームページ

大隅流域森林・林業活性化センターでは、林業を始める際の支援制度や、地域の林業事業体、木材利用、造林に使える補助事業など詳しく掲載しています。



大隅森林組合南大隅支所
唐仁原拓海さん

鹿屋農業高校の緑地工学課を卒業し、昨年、大隅森林組合に入社した唐仁原拓海さん。山で働く父の姿を見て育ったこともあり、子どもの頃から自然や林業機械に興味があったそう。高校では移動式クレーンの資格などを取得。今年から「緑の雇用」事業を活用し、林業をさらに詳しく学んでいく。「とくに高性能林業機械の資格を取得して、地元の森林整備の力になりたい」と想いを語る田代麓地区出身の19歳。